

【黙祷に続き、熊本地震、千葉の大豪雨の被害者への思いを語る。】

君たちに、今、何を期待したいか。 それは、『想像力』です。

式典はたかだか30分程度、終われば涼しい教室に戻れます。

でも、被災者の方々は、この暑い中、住む家を追われ、クーラーもない環境で何日も過ごしている。 着替えさえ儘ならず、食事も満足に摂れない。 肉体だけではなく、心も極度に疲弊する。汗をかいた体を洗い流すシャワーや風呂もない。

リフレッシュなんて、とてもできない。

仮説のトイレはあるけれど、十分な数はなく、不衛生で暑い。 トイレの回数を減らそうと、飲むことも、食べることもできるだけ我慢すれば、それが、重篤な熱中症を引き起こします。

日常がそうってしまった自分や家族を 想像できるだろうか。

さっきまで隣にいた大切な人、愛する人が突然帰らぬ人になった人の悲しみを、経験したことがある人は少ない。 でも、その人の気持ちを察することはできる。

自分事のように受け止め、その人を支えられるだろうか。 寄り添えるだろうか。私は、寄り添い続けられるだろうか。

すべては、私たち自身が、 『自分だったら・・・』という『想像力』 その想像力が、豊かなのか否かに掛かっています。

静岡で暮らす私たちは、心配され続ける東海地震、並びに南海トラフ地震が起これば、過去最大級の被害が出るであろう、中心に位置する地域で生活しています。

30年近く難を逃れていること自体、奇跡なのかもしれません。

あってほしくない、そう願いながらも、予断を許さない状況に変わりません。

体育館の中は、決して快適ではありませんが、西高のみなさんの元気な姿が見れて、こうして無事に二学期のスタートを迎えられたことを、本当に嬉しく思います。

『想像力』 みなさんには、相手の置かれた境遇、自分だったらどんな気持ちになるのか。そうした『想像力』を大いに働かせて、他人事や対岸の火事にせず、出来る限り『自分事』に捉える習慣と、相応しい行動がとれるようになって欲しいと思います。

西高の話をしましょう。 まず、一学期を振り返ってみてください。

今年度、西高全体で重点として取り組んできた「あらゆる場面で礼儀正しい挨拶ができる西高生」。 この成果は確実に表れています。

校内でも、校外でも、活気あふれる元気な挨拶が、だいぶ交わされるようになり、学校全体に爽やかな風が吹き始めました。

その上で、一学期の終わりには、小原副校長先生から、「挨拶の質を高めよう」という話がありました。

これまでも、式典などの節目で話している 『キーワード』
『本気で向き合うことでしか見えない景色。 自分の秤。』
『未見の我。 出合いを大切にし、チャレンジすること。』

こうしたみなさんに向けたメッセージは、

みなさん自身が、自分事として、キチンと受け取る責任がある。

『挨拶』は、単に声を出すだけでなく、立ち止まり、相手の様子を見て、目を見て挨拶をする。

TPO（時・場所・場合）に応じた目配り・気配り・心配りのある挨拶をする。

私が視聴覚室に入ろうとした時、最初に私を見つけた男子生徒が、スッと立ち上がり、伸びた背筋で『おはようございます。』と言った。 次の瞬間、そこに居合わせたクラス代表の生徒全員が、スッと立ち上がり、同じようにしてくれた。

小原先生は、『自分のことのように嬉しかった。』と仰いました。

私は、胸が熱くなっていくのを感じたが、平静を装い軽めに『素晴らしい』とだけ呟いた。 昨年までには感じなかった感覚。

西高の中だけでなく、十分に外で通用すると確信した瞬間でした。

これを、成長と呼ばずに何と表現するだろう。 嬉しかった。

でもね。まだまだ日によって波がある。意識を高く維持し続けて、無意識にそうした振る舞いが出来るようになるまでやって欲しい。そう思います。

各分掌の先生方からも、心強いお話がありました。教務課長の谷戸先生から、「やる気を待つのではなく、毎日続けられる小さなルーティン（仕組み）を作ろう。」

生徒課長の宮原先生からは、『どこでその礼儀を身につけたの?』と聞かれたら、自信を持って『清水西高校で徹底して教えてもらいました。』そう答えられる自分になろうという話です。

先生方が異口同音に、西高生の底力を信じ、みなさんの心に届く言葉を投げかけてくれたことに、校長として胸が熱くなりました。

西高の先生方は、本気で皆さんを誇れる生徒に育てようとしている。そして、みなさんはそれに応え始めました。

さて、今日から二学期という「新たなステージ」が始まります。行事も多く、学びも深まる、一年の中で最も長い学期です。

二年生は、沖縄での修学旅行も控えています。

今年は戦後81年目になります。沖縄は透明度の高い海・やんばる原生林などの美しい自然、9つの世界遺産、透明度の高い美しい海や、唯一無二の自然環境、琉球王朝時代からの歴史、沖縄独自の文化など様々な魅力があります。

一方で、日本で唯一壮絶な地上戦が展開された地でもあります。冒頭で話したように、大切な場所や人を、一瞬で奪われた悲しい経験。そうした思いをした人に寄り添う。出来ることを考える。 本当の苦労や悲しみは、それを知る人ほど語りたがらないものです。 そうした口を閉ざしがちな悲痛な思いをした方々の思いを、遠く離れた静岡に暮らす私たちが、『想像する。』

戦争という過ちを、決して繰り返してはならない、後世に伝えなければならない。そんな祈りにも似た思いで始まった『語り部』活動も、そうした方々の高齢化で、後継者問題などの難しい局面を迎えています。 当時のことを決して風化させてはなりません。

周りにいる人たちが、『自分事』に考えて、出来ることをする。それと同じことだと思えます。 重ねて考えてみてください。

ここで皆さんに、二学期のチャレンジに向けてメッセージを贈ります。

キーワードは 「自分で決めて、小さく動き出すこと」 です。

夏休み中、自分のルーティンを守れた人も、少しダラけてしまったという人もいるかもしれません。でも、今日からリセットです。高い目標を掲げて途中で挫折するよりも、「毎日これだけはやる」という決して高すぎない決まりを自分で設定し、淡々と続けてみてください。

挨拶の「立ち止まって目を見る」を 毎朝必ず意識する。

毎日の勉強や部活動で「これだけはやる。」と、 小さな行動を決める。

「やる気」は、待っていても湧いてきません。

行動を起こすから、あとから「やる気」がついてくるのです。

誰かに言われてやるのではなく、あくまで自分の意思で持続可能な「仕組み」を作り、一歩を踏み出す。

その積み重ねが、皆さんの中に 自分にしかない「折れない自信」を作ります。

勉強、部活動、学校行事、そして進路に向けた取り組み。

様々な場面で、西高生が主体的にチャレンジし、お互いに高め合える姿が見られることを楽しみにしています。

「質の高い挨拶」 ができる西高生。

「自分で決めたルーティンをやり抜く」 たくましい西高生。

自信を持って言えます。君たちは、自分を成長させることが出来る環境の中にいます。でも、『西高生でいて良かった。』本気でそう思えるようになるには、自分が自分の物語の主人公となって、生き生きと輝こうとすること。それが結果として、そうした人が数多く集まった『西高の物語』になっていくのです。

最高の二学期を、ここにいるみなさんと、一緒につくっていきましょう。

令和8年度 2 学期始業式の校長訓話とします。